

# 骨董羹

—寿陵余子の仮名のもとに筆を執れる戯文—

芥川龍之介

青空文庫



## 別乾坤

Judith Gautier が詩中の支那は、支那にして又支那にあらず。葛飾北齋が水滸画伝の挿画も、誰か又是を以て如実に支那を写したりと云はん。さればかの明眸の女詩人も、この短髪の老画伯も、その無声の詩と有声の画とに彷彿たらしめし所謂支那は、寧ろ彼等が白日夢裡に逍遙遊を恣にしたる別乾坤なりと称すべきか。人生幸にこの別乾坤あり。誰か又小泉八雲と共に、天風海濤の蒼々浪々たるの処、去つて還らざる蓬萊の蜃中楼を歎く事をなさん。(一月二十二日)

## 軽薄

元の李※ 文湖州の竹を見る数十幅、悉意に満たず。東坡山谷等の評を讀むも亦思ふらく、その交親に私するならんと。偶友人王子慶と遇ひ、話次文湖州の竹に及ぶ。子慶日、君未真蹟を見ざるのみ。府史の蔵本甚真、明日借り来つて示すべしと。翌日即

之を見れば、風枝抹疎として塞煙を払ひ、露葉蕭索として清霜を帯ぶ、恰も渭川淇水の間かんに坐するが如し。※感歎措お能あたはず。大いに聞見の寡陋くわろうを恥ぢたりと云ふ。※の如きは未恕いまだよすべし。かの写真版のセザンヌを見て色彩のヴァリユルを喋々てふてふするが如き、論者の輕薄唾棄するに堪へたりと云ふべし。戒めずんばあるべからず。(一月二十三日)

## 俗漢

バルザツクのペエル・ラシエエズの墓地に葬らるるや、棺側に侍するものに内相バロツシユあり。送葬の途上同じく棺側にありしユウゴオを顧みて尋ぬるやう、「バルザツク氏は材能の士なりしにや」と。ユウゴオふつく呼として答ふらく「天才なり」と。バロツシユその答にや憤りいきどほけん傍人ぼうじんに囁いて云ひけるは、「このユウゴオ氏も聞きしに勝る狂人なり」と。仏蘭西の台閣だいかく亦這般またしやはんの俗漢なきにあらず。日東帝国の大臣諸公、意を安んじて可なりと云ふべし。(一月二十四日)

## 同性恋愛

ドオリアン・グレエを愛する人は Escal Vigor を読まざる可からず。男子の男子を愛するの情、この書の如く遺憾なく描写せられしはあらざる可し。書中若しこれを翻訳せんか。我当局の忌違に触れん事疑なきの文字少からず。出版当時有名なる訴訟事件を惹起したるも、亦是等艶冶の筆の累する所多かりし由。著者 George Ekhouid は白耳義近代の大手筆なり。声名必しもカミュ・ルモニエの下にあらず。されど多士濟々たる日本文壇、未この人が等身の著述に一言の紹介すら加へたるもの無し。文芸豈独り北歐の天地にのみ、オウロラ・ボレアリスの盛観をなすものならんや。(一月二十五日)

### 同人雑誌

年少の子弟醸金して、同人雑誌を出版する事、当世の流行の一つなるべし。されど紙代印刷費用共に甚廉ならざる今日、経営に苦しむもの亦少からず。伝へ聞く、ル・メルキウル・ド・フランスが初号を市に出せし時も、元より文壇不遇の士の黄白に裕なる筈なければ、やむ無く一株六十法の債券を同人に募りしかど、その唯一の大株主た

るジユウル・ルナルが持株すら僅々きんぎん四株に過ぎざりしとぞ。しかもその同人の中には、アルベエル・サマンの如き、レミ・ド・グルモンの如き、一代の才人多かりしを思へば、当世流行の同人雑誌と雖も、資金の甚潤はなはだゆんたく沢ならざるを憾むべき理由なきに似たり。唯、得難きは当年のル・メルキウルに、象徴主義の大旆たいはいを樹たてしが如き英靈底えいれいていの漢一かんダアスのみ。(一月二十六日)

## 雅号

日本の作家今は多く雅号ががうを用ひず。文壇の新人旧人を分つ、殆ほとんど雅号の有無を以てすれば足るが如し。されば前に雅号さきありしも捨てて用ひざるさへ少からず。雅号の薄命なるも亦また甚しいかな。露西亞ロシアの作家にオシツプ・デイモフと云ふものあり。チエホフが短篇「蝗いなご」の主人公と同名なりしと覚ゆ。デイモフはその名を借りて雅号となせるにや。博覧の士の示教しけうを得れば幸甚かうじんなり。(一月二十八日)

## 青楼

フランス 仏蘭西語に妓楼ぎろうを「la maison verte」と云ふは、ゴンクウルが造語なりとぞ。蓋し青楼美人けだ合せの名を翻訳せしに出づるなるべし。ゴンクウルが日記に云ふ。「この年（千八百八十二年）わが病的なる日本美術品蒐集しゅうしふの為に費せし金額、実に三千法フランに達したり。これわが収入の全部にして、懐中時計を購ふべき四十法フランの残余さへ止めず」と。又云ふ。「数日以来（千八百七十六年）日本に赴かばやと思ふ心止め難し。されどこの旅行はわが日頃の蒐集癖しゅうしふを充みたさんが為のみにはあらず。われは夢む、一卷の著述を成さん事を。題は『日本ほんの一年』。日記の如き体裁。叙述よりも情調。かくせば比類なき好文かうもんじ字を得べし。唯、わがこの老ちゆうを如何いかん」と。日本の版画を愛し、日本の古玩こくわんを愛し、更に又日本の菊花を愛せる伶れい孤へい寂じやくのゴンクウルを想おもへば、青楼の一語短いへどなりと雖も、無限の情味なき能あたはざるべし。（一月二十九日）

### 言語

言語は元もとより多端さんなり。山さんと云ひ、嶽かくと云ひ、峯ほうと云ひ、巒らんと云ふ。義の同うして字の

異なるを用ふれば、即ち意を隱微の間に偶するを得べし。大食ひを大松と云ひ差出  
 者を左兵衛次と云ふ。聞くものにして江戸つこならざらんか、面罵せらるるも猶恬然  
 たらん。試に思へ、品蕭の如き、後庭花の如き、倒澆燭の如き、金瓶梅肉蒲  
 団中の語彙を借りて一篇の小説を作らん時、善くその淫褻俗を壊るを看破すべき検閲  
 官の数何人なるかを。(一月三十一日)

誤訳

カアライルが独逸文の翻訳に誤訳指摘を試みしは、デ・クインシイがさかしらなり。され  
 どチエルシイの哲人はこの後進の鬼才を遇する事一  
 反つて甚篤かりしかば、デ・クインシイも亦その襟懷に服して百年の心交を結びたりと云  
 ふ。カアライルが誤訳の如何なりしかは知らず。予が知れる誤訳の最も滑稽なるはマドン  
 ナを奥さんと訳せるものなり。訳者は楽園の門を守る下僕天使にもあらざるものを。(二  
 月一日)



## 戲訓

往年久米正雄氏シヨウを訓して笑迂と云ひ、イブセンを訓して燻仙と云ひ、メエテルリンクを訓して暝照燐火と云ひ、チエホフを訓して知慧豊富と云ふ。戲訓と称して可ならん乎。二人比丘尼の作者鈴木正三、その耶蘇教弁斥の書に題して破鬼理死端と云ふ。亦また惡意ある戲訓の一例たるべし。(二月二日)

## 俳句

紅葉こうえふの句未古人靈妙の機を会せざるは、独りその談林調たるが故のみにもあらざるべし。この人の文を見るも楚々たる落墨直に松を成すの妙はあらず。長ずる所は精整せいせい緻密、石を描いて一細草の点綴を忘れざる功にあり。句に短なりしは当然ならずや。牛門ぎゅうもんの秀才鏡花氏の句品遙に師翁の上に出づるも、亦この理に外ならざるのみ。遮さもあらばあれさいとうりよくう莫も斎藤緑雨が彼縦横の才を蔵しながら、句は遂に沿門※黒の輩と軒軽けんけいなかりしこそ不思議なれ。(二月四日)

## 松並木

東海道とうかいだうの松並木まつなみき伐きらるべき由、何時いつやらの新聞紙にて読みたる事あり。元もとより道路改修かいしゆの為とあれば止むを得ざるには似たれども、これが為なほに百尺ひやくせきの枯龍斧鉞こりゆうふあつの災さいを蒙かうむるもの百千なるべきに想到すれば、惜みても猶なほ惜むべき限りならずや。ポオル・クロオデル日本に來りし時、この東海道の松並木を見て作る所の文一篇あり。瘦蓋煙そうがいを含きみ危根石こんを倒すの状、描ゑがき得て靈彩れいさい奕えき々えきたりと云ふべし。今やこの松並木亡びんとす。クロオデルもしこれを聞かば、或は恐る、黄面くわうめんの豎子じゆい未王化まだに浴せずと長太息ちやうたいそくに堪へざらん事を。(二月五日)

## 日本

ゴオテイエが娘の支那シナは既に云ひぬ。[Jose' Maria de Heredia] が日本またも亦別乾坤たつげんこんなり。簾裡れんりの美人琵琶びはを弾たんじて鉄衣の勇士の來きたるを待まちつ。景情元もとより日本ならざるに非ず。

(Le samourai) されどその絹の白と漆と金とに彩られたる世界は、却つて是縹渺たるパルナシアンの夢幻境のみ。しかもエレディアの夢幻境たる、もしその所在を地図の上に按じ得べきものとせんか、恐らく仏蘭西には近けれども、日本には遙に隔りたるべし。彼ゲエテの希臘ギリシヤと雖も、トロイの戦の勇士の口には一抔いつまつミュンヘンの麦酒ビールの泡の未消えざるを如何にすべき。歎ずらくは想像にも亦国籍またの存する事を。(二月六日)

## 大雅

東海の画人多しとは云へ、九霞山樵きうかさんせうの如き大器又あるべしとも思はれず。されどその大雅たいがすら、年三十に及びし時、意の如く技の進まざるを憂ひて、教を祇南海ぎなんかいに請ひし事あり。血性けつせい大雅に過ぐるもの、何ぞ進歩の遅々たるに焦燥せうそうの念無きを得可けんや。唯、返へす返すも学ぶべきは、聖胎せいだい長養ちやうやうの機を誤らざりし九霞山樵の工夫くふうなるべし。(二月七日)

## 妖婆

英語に witch と唱ふるもの、大むねは妖婆えうばと翻訳すれど、年少美貌のウイツチまた亦決して少しとは云ふべからず。メレジュウコウスキイが「先覚者」ダンヌンツイオが「ジヨリオの娘」或は遙に品下しながれどクロオフォオドが Witch of Prague など、顔玉たまの如きウイツチを描ゑがきしもの、尋ぬれば猶多かるべし。されど白髪蒼顔のウイツチの如く、活躍せる性格少いなきは否いなみ難き事実ならんか。スコット、ホオソオンが昔は問はず、近代の英米文学中、妖婆を描きて出色なるものは、キツプリングが The Courting of Dinah Shadd の如き、或は随一とも称すべき乎か。ハアデイが小説にも、妖婆に材を取る事珍らしからず。名高き Under the Greenwood の中なる、エリザベス・エンダアフィールドもこの類なり。日本にては山姥おにほぼ鬼ほ婆ぼ共に純然たるウイツチならず。支那にてはかの夜譚やたんずあろく随録ずいりく載する所の夜星やせいし子なるもの、略妖婆ほぼたるに近かるべし。(二月八日)

### 柔術

西人せいじんは日本と云ふ毎ごとに、必かならず柔術を想起すと聞けり。さればにやアナトオル・フランス

が「天使の反逆」の一章にも、日本より巴里パリに来れる天使仏蘭西フランスの巡查けいさを搔かい掴つかんで物も見事に投げ捨つるくだりあり。モオリス・ルブランが探偵小説の主人公けいせう、賊ぞくリユパンが柔術に通じたるも、日本人より学びし所なりとぞ。されど日本現代の小説中、柔術の妙を極めし主人公は僅に泉鏡花いづみきやうくわ氏が「芍薬しやくやくの歌」の桐太郎きりたらうのみ。柔術も亦また予言者は故郷いに容いれられざるの歎無きを得んや。好笑かうせう好笑かうせう。 (二月十日)

### 昨日の風流

趙甌てうおう北ほくが呉門ごもん雑詩ざつしに云ふ。看えん尽くわ煙を花みつ細くして品こまかに評ひん、始はじめ知て佳麗いかげい也また虚きよめい  
 なるを、いまよりおこさずはんくわのゆめ、消領せうりやう茶煙さえん一縷いちる清せい。又その山塘さんたうの詩に云ふ。老おいてく  
 名、従今じゆん不作ふ繁華はんか夢む、煙花えんか猶なほ記き昔遊會せきゆうかい、酒樓しゆうろう旧日きうじつ紅粧しやうの女ぢよ、已すで似に  
 入わんじやう歡い場ば感かん易まし増やすし、煙花えんか猶なほ記き昔遊會せきゆうかい、酒樓しゆうろう旧日きうじつ紅粧しやうの女ぢよ、已すで似に  
 禪家ぜんか退院たいえん僧そう。一腔いつかうの詩情ほとん殆なほ永井荷風えいせい氏あかふうを想おもはしむるものありと云ふべし。 (二月  
 十一日)

### 発音

ポオの名 Quantin 版に [Poe:] と印刷せられてより、仏蘭西フランスを始め諸方にポオエの発音行はれし由。予等が英文学の師なりし故口オレンス先生も、時にポオエと発音せられしを聞きし事あり。西人せいじんの名の発音の誤り易きはさる事ながら、ホイットマン、エマスンなどを崇め尊ぶ人のわが仏ほとけの名さへアクセントを誤りたるは、無下むげにいやしき心地せらる。慎つつしまざる可らざるなり。(二月十三日)

### 傲岸不遜

一青年作家或会合の席上にて、われら文芸の士はと云ひさせしに、傍かたはらなるバルザック忽ちその語を遮さへぎつて云ひけるは、「君の我等に伍せんとするこそ烏滸をこがましけれ。我等は近代文芸の將帥しやうすうなるを」と。文壇の二三子夙つとに傲岸不遜がうがんふそんの譏そしりありと聞く。されど予は未いまぬち一人のバルザックに似たるものを見ず。元もとより人間喜劇の著述二三子の手に成るを聞かざれども。(二月十五日)

## 煙草

煙草たばこの世に行はれしは、亜米利加アメリカ発見以後の事なり。埃及エジプト、亞刺比亞アラビア、羅馬ロオマなどにも、  
 喫煙の俗ありしと云ふは、青盲せいまうしやりう者流のひが言のみ。亜米利加土人の煙を嗜たしなみしは、コ  
 ロムブスが新世界に至りし時、既に葉卷あり、刻きざみあり、喫煙草かぎありしを見て知るべし。  
 タバコの名も実は植物の名称ならで、刻みの煙を味ふべきパイプの意なりしぞ滑稽なる。  
 されば歐洲の白色人種が喫煙に新機軸いだを出したるは、僅に一事軽便なるシガレットの案出  
 ありしのみ。和漢わかんさんさいづゑ三才函会によれば、南蛮紅毛こうもうの甲比丹かびたんがまづ日本に船載はくさいしたるも、  
 このシガレットなりしもの如し。村田むらたの煙管きせる末世ゑまだに出でざりし時、われらが祖先は既に  
 シガレットを口にしつつ、春しゅんじつ日煦々くくたる山口の街頭、天主会堂の十字架を仰いで、西  
 洋機巧の文明に賛嘆の声を惜まざりしならん。(二月二十四日)

## ニコチン夫人

ボオドレエルがパイプの詩は元もとより、Lyra Nicotiana を翻ひるがへすも、西洋詩人の喫煙を愛めづ

るは、東洋詩人の点茶てんちゃを悦ぶと好一對かういつつゐなりと云ふを得べし。小説にてはバリイが「ニコチン夫人」最も人口に膾炙くわいしやしたり。されど唯輕妙の筆ひつ、容易に読者を微笑せしむるのみ。ニコチンの名、もと仏蘭西人ジアン・ニコツトより出づ。十六世紀の中葉、ニコツト大使の職を帯びて西班牙に派遣せらるるや、フロリダ渡来の葉煙草を得て、その医療に効あるを知り、栽培さいばい大いに努めしかば、一時は仏人煙草を呼んでニコチアナと云ふに至りしとぞ。デ・クインシイが「阿片喫煙者の懺悔ざんげ」は、さきに佐藤春夫氏をして「指紋しもん」の奇文を成さしめたり。誰か又バリイの後にでて、バリイを抜く事数等なる、恰あたかもハヴアナのマニラに於ける如き煙草小説を書かんものぞ。(二月二十五日)

### 一字の師

唐たうの任翻じんはん天台巾子峯てんだいきんしほうに遊び、詩を寺壁に題して云ふ。「絶頂ぜつちやう新秋しんしゅう生夜しやう涼ず。鶴翻つるはひるがへつてしようろいしやうにしたる松露せんぼうつきはてるいつかうのみづ滴衣裳そくいじやう。前峯ぜんぼう月照げつしやう一江水いつかうすゐ。僧在翠微そうはすゐびにあつてちくば開をひらく竹房ちくぼう。」題し畢つて後行く事数十里、途上一江水いつかうすゐは半江水はんかうすゐに若かざるを覚り、直ただちに題詩の処かへに回れば、何人なんびとか既に「一」字を削つて「半」字に改めし後のちなりき。翻長はんちやう



うたいそく  
 太息に堪へずして曰、台州有人と。古人が詩に心を用ふる、慘憺經營の跡想ふべし。  
 せいせい  
 青々が句集妻木の中に、「初夢や赤なる紐の結ほほる」の句あり。予思ふらく、一字不  
 可、「る」字に易ふに「れ」字を以てすれば可ならんと。知らず、青々予を拝して能く一  
 字の師と做すや否や。一笑。(二月二十六日)

### 応酬

ユウゴオ一夕宴をアヴニウ・デイロオの自邸に張る。偶衆客皆杯を挙げて主人の健  
 康を祝するや、ユウゴオ傍なるフランソア・コツペエを顧みて云ふやう、「今この席上な  
 る二詩人送たがひに健康を祝さんとす。亦善またからずや」と。意コツペエが為に乾杯せんとするに  
 あり。コツペエ辞して云ふ、「否、否、座間詩人は唯一人あるのみ」と。意詩人の名に  
 背そむかざるものは唯ユウゴオ一人のみなるを云ふなり。時に「オリアンタアル」の作者、  
 忽ち破顔して答ふるやう、「詩人は唯一人あるのみとや。善し、さらば我は如何」と。  
 意コツペエが言を翻ひるがへしておのが仰損を示せるなり。曰く「僧院の秋」の会、曰く「三浦製  
 糸場主」の会、曰く猫の会、曰く杓子の会、方今の文壇会甚多しと雖も、未滑脱

の妙を極めたる、斯くの如き応酬ありしを聞かず。傍に人あり。嗤つて云ふ、「請ふ、隗より始めよ」と。(二月二十七日)

### 白雨禪

狩野芳涯常に諸弟子に教へて曰、「画の神理、唯当に悟得すべきのみ。師授によるべからず」と。一日芳涯病んで臥す。偶白雨天を傾けて来り、深巷寂として行人を絶つ。師弟共に黙して雨声を聴くもの多時、忽ち一人あり。高歌して門外を過ぐ。芳涯莞爾として、諸弟子を顧みて曰、「会せりや」と。句下殺人の意あり。吾家の吹毛劍、单于千金に購ひ、妖精太陰に泣く。一道の寒光、君看取せよ。(三月三日)

### 批評

ピロンが、皮肉は世に聞えたり。一文人彼に語るに前人未発の業を成さん事を以てす。ピロン冷然として答ふらく、「易々たるのみ。君自身の讃辞を作らば可」と。当代の文壇、

聞くが如くんば、党派批評あり。売笑批評あり。挨拶批評あり。雷同批評あり。紛々たる毀譽褒貶、庸愚の才が自讃の如きも、一犬の虚に吠ゆる処、万犬亦実を伝へて、必しもピロンが所謂、前人未発の業と做す可らず。寿陵余子生れてこの季世にあり。ピロンたるも亦難いかな。(三月四日)

### 誤謬

門前の雀羅蒙求を囀ると説く先生あれば、燎原を焼く火の如しと辯ずる夫子あり。明治神宮の用材を賛して、彬々たるかな文質と云ふ農学博士あれば、海陸軍の拡張を議して、鱉鱉罷休あらざる可らずと云ふ代議士あり。昔は姜度の子を誕するや、李林甫手書を作つて曰、聞く、弄の喜ありと。客之を視て口を掩ふ。蓋し林甫の璋字を誤つて、字を書せるを笑へるなり。今は大臣の時勢を慨するや、危険思想の瀾漫を論じて曰、病既に膏盲に入る、国家の興廢旦夕にありと。然れども天下怪しむ者なし。漢学の素養の顧られざる、亦甚しと云はざる可らず。況や方今の青年子女、レツテルの英語は解すれども、四書の素読は覚束なく、トルストイの名は耳に熟すれども、李青蓮の

号は眼に疎きもの、紛々として数へ難し。頃日偶書林の店頭に、数冊の古雑誌を見る。題して紅潮社発兌紅潮第何号と云ふ。知らずや、漢語に紅潮と云ふは女子の月経に外ならざるを。(四月十六日)

入月

西洋に女子の紅潮を歌へる詩ありや否や、寡聞にして未之を知らず。支那には宮掖閨閣の詩中、稀に月経を歌へるものあり。王建が宮詞に曰、「密奏君王知入月、喚人相伴洗裙裾」と。春風珠簾を吹いて、銀鉤を蕩するの処、蛾眉の宮人の衣裾を洗ふを見る、月事も亦風流ならずや。(四月十六日)

遺精

西洋に男子の遺精を歌へる詩ありや否や、寡聞にして未之を知らず。日本には俳諧錦繡段に、「遺精驚く暁のゆめ、神叔」とあり。但この遺精の語義、果して当代に用

ふる所のものと同じきや否やを詳にせず。識者の示教を得ば幸甚なり。(四月十六日)

### 後世

君見ずや。本阿弥の折紙古今に變ず。羅曼派起つてシエクスピイアの名、四海に轟く  
 事迅雷の如く、羅曼派亡んでユウゴオの作、八方に靡るる事霜葉に似たり。茫茫たる  
 流転の相。目前は泡沫、身後は夢幻。智音得可からず。衆愚度し難し。フラゴナルの技  
 を以太利に修めんとするや、ブウシエその行を送つて曰、「ミシエル・アンジユが作を見  
 ること勿れ。彼が如きは狂人のみ」と。ブウシエを晒つて俗漢と做す。豈敢て難しとせん  
 や。遮莫千年の後、天下靡然としてブウシエの見に赴く事無しと云ふ可らず。白  
 眼当世に傲り、長嘯後代を待つ、亦是鬼窟裡の生計のみ。何ぞ若かん、俗に混じて、  
 しかも自ら俗ならざるには。籬に菊有り。琴に絃無し。南山見来れば常に悠々。寿陵  
 余子文を陋屋に売る。願くば一生後生を云はず、紛々たる文壇の張三李四と、  
 トルストイを談じ、西鶴を論じ、或は又甲主義乙傾向の是非曲直を喋々して、遊戯三  
 昧の境に安んぜんかな。(五月二十六日)

## 罪と罰

鷗外おうぐわい先生を主筆とせる「しがらみ草紙」第四十七号に、謫天たくてん情僊じやうせんの七言絶句、  
 「読罪つみとばつ与罰じやうへん上篇」数首あり。泰西たいせいの小説に題するの詩、嚆矢かうし恐らくはこの数首に  
 あらんか。左にその二三を抄出すれば、「考慮かうりよ閃ひら来め如き電きた光たつて、茫然ばうぜん飛入とんで  
 老らう婆ば房ぼう、自談みづから罪だん跡ず真ざい耶せい假しん、警けい吏い暗あん殺さつ狂きやう不ふ狂きやう」(第十三回)「窮きゆう  
 女よ病びやう妻さい哀あ涙なみだ紅こう、車しや声せい輾れん輾れん仆ふ家か翁う、傾か囊ねい相さう救きゆう客かく何なん  
 侠ぎやく、一いち度ど相あ逢ひ酒しゆ肆し中ちゆう」(第十四回)「可か憐れん小せう女ぢよ去き邀いん賓びん、慈じ善ぜん書しよ生せい半はん  
 死し身み、見み到いた室しつ中ちゆう無む一いつ物ぶつ、感かん恩おん人ひと是これ動どう情じやう人ひと」(第十八回)の如し。詩の  
 佳否かひは暫く云はず、明治二十六年の昔、既に文壇ドストエフスキイを云々するものありし  
 を思へば、この数首の詩に対して破顔一番するを禁じ難きもの、何ぞ独り寿陵じゆりやうよし余子よしのみ  
 ならん。(五月二十七日)

## 悪魔

悪魔の数甚多し。総数百七十四万五千九百二十六匹あり。分つて七十二隊を為し、一隊毎に隊長一匹を置くとぞ。是れ十六世紀の末葉、独人 *Wierus* が悪魔学に載する所、古今を問はず、東西を論ぜず、魔界の消息を伝へて詳密なる、斯くの如きものはあらざるべし。(十六世紀の欧羅巴には、悪魔学の先達からず。ウイルスが外にも、以太利の *Pietro d'Apone* の如き、英克蘭の *Reginald Sock* の如き、皆天下に雷名あり。) 又曰、「悪魔の変化自在なる、法律家となり、昆侖奴となり、黒驪となり、僧人となり、驢となり、猫となり、兎となり、或は馬車の車輪となる」と。既に馬車の車輪となる。豈半夜人を誘つて、煙火城中に去らんとする自動車の車輪とならざらんや。畏る可く、戒む可し。(五月二十八日)

### 聊齋志異

聊齋志異が剪燈新話と共に、支那小説中、鬼狐を説いて、寒燈為に青からんとする妙を極めたるは、洽く人の知る所なるべし。されど作者蒲松齡が、滿洲朝廷に潔からざる

の余り、牛鬼蛇神の譚に託して、宮掖の隱微を諷したるは、往々本邦の読者の為に、  
 看過せらるるの憾みなきに非ず。例へば第二卷所載、女けふじよの如きも、実は宦人年くわんじんねんか  
 羹堯うげうの女が、雍正帝を暗殺したる秘史の翻案に外ならずと云ふ。崑崙外史の題詞  
 に、「董狐豈独人倫鑒」と云へる、亦這般またしやはんの消息を洩らせるものに非ずし  
 て何ぞや。西班牙スペインにゴヤの Los Caprichos あり。支那に留仙りうせんの聊齋志異あり。共に山精さんせい  
 野鬼いやきを借りて、乱臣賊子を罵殺せんとす。東西一雙の白玉瓊はくぎよくけい、金匱きんきの蔵ざうに堪へたりと  
 云ふべし。(五月二十八日)

## 麗人図

西班牙スペインに麗人あり。Dona Maria Theresa と云ふ。若くしてヴァイラフランカ十一代の侯  
 [Don Jose' Alvarez de Toledo] に嫁す。明眸絳脣めいぼうかうしん、香肌白き事脂しの如し。女王マリア  
 ・ルイザ、その美を妬ねたみ、遂に之を鳩殺ちんさつせしむ。人間止め得たり一香囊の長恨ある、  
 かの楊太真やうたいしんと何れぞや。侯爵夫人に情郎じやうらうあり。Francesco de Goya と云ふ。ゴヤは画  
 名を西班牙に馳はするもの、生前屢しばしばドンナ・マリア・テレサの像を描ゑがく。俗伝にして信ずべ



くんば、Maja vestida と Maja desnuda との 両 画 幀、亦 実 に 侯 爵 夫 人 が 一 代 の 国 色 を 伝  
 へる が 如 し。後 年 仏 蘭 西 に 一 画 家 あり。Edouard Manet と 云 ふ。ゴ ヤ が 侯 爵 夫 人 の 画 像 を  
 得 て、狂 喜 自 ら 禁 ず る 能 は ず。直 に そ の 画 像 を 模 し て、一 幀 春 の 如 き 麗 人 図 を 作 る。マ  
 ネ 時 に 印 象 派 の 先 達 たり。交 を 彼 と 結 ぶ も の、当 世 の 才 人 尠 か ら ず。そ の 中 に 一 詩 人 あり。  
 Charles Baudelaire と 云 ふ。マ ネ が 侯 爵 夫 人 の 画 像 を 得 て、愛 翫 す る 事 洪 璧 の 如 し。  
 千 八 百 六 十 六 年、ボ オ ド レ エ ル の 狂 疾 を 発 し て、巴 里 の 寓 居 に 絶 命 す る や、壁 間 亦 こ の 檀  
 口 雪 肌、天 仙 の 如 き 麗 人 図 あり。星 眼 長 へ に 秋 波 を 浮 べ て、「悪 の 華」の 詩 人 が 臨 終 を  
 見 る、猶 往 年 マ ド リ ツ ド の 宮 廷 に、黄 面 の 侏 儒 が 筋 斗 の 戯 を 傍 観 す る が 如 け け け し と 云  
 ふ。(五 月 二 十 九 日)

売 色 鳳 香 餅

支 那 に 龍 陽 の 色 を 売 る 少 年 を 相 公 と 云 ふ。相 公 の 語、も と 像 姑 姑 より 出 づ。妖  
 恰 も 姑 娘 の 如 け け なる を 云 ふ な り。像 姑 相 公 同 音 相 通 ず。即 用 ひ て 陰 馬 の 名 に 換 へ た  
 る の み。支 那 に 路 上 春 を 鬻 ぐ の 女 を 野 雉 と 云 ふ。蓋 し 徘徊 行 人 を 誘 ぶ、恰 も 野 雉 の 如 け

なるを云ふなり。邦語にこの輩を夜鷹と云ふ。殆同一轍に出づと云ふべし。野雉の語行はれて、野雉車の語出づるに至る。野雉車とは仰何ぞ。北京上海に出没する、無鑑札の朦朧車夫なり。(五月三十日)

### 泥黎口業

寿陵余子雑誌「人間」の為に、骨董羹を書く事既に三回。東西古今の雑書を引いて、術学の気焰を挙ぐる事、恰もマクベス曲中の妖婆の鍋に類せんとす。知者は三千里外にその臭を避け、昧者は一弾指間にその毒に中る。思ふに是泥黎の口業。羅貫中水滸伝を作つて、三生唾子を生むとせば、寿陵余子亦骨董羹を書いて、仰如何の冥罰をか受けん。黙殺か。撲滅か。或は余子の小説集、一冊も市に売れざるか。若かず、速に筆を投じて、酔中独り繡仏の前に逃禪の閑を愛せんには。昨の非を悔い今の是を知る。何ぞ須臾も踟蹰せん。抛下す、吾家の骨董羹。今日喫し得て珍重ならば、明日厠上に瑞光あらん。糞中の舍利、大家看よ。(五月三十日)

\* \* \*

## 天路歷程

Pilgrim's Progress を天路歷程てんろれきていと翻訳するのは清の同治八年（西曆千八百六十九年）上海華草書館にて出版せる漢訳の名を踏襲たうしふせるにや。この書、篇中の人物風景を悉支那風に描きたる銅版画の挿画数葉あり。その入窄門にふさくもんづ図の如き、或は入美宮いしつみやく図の如き、長崎絵の紅毛人に及ばざれど、亦一種の風韻ふうゐん無きに非らず。文章も漢を以て洋を叙じよするの所、読み来り読み去つて感興反つて尠すくなからざるを覚ゆ。殊にその英詩を翻訳したる、詩としては見るに堪へざらんも、別様の趣致あるは挿画と一なり。譬たとへば生命水の河の詩に「路ろばうのせいめいみつきよくながる、てんろのかうじんよろこびしばらくとどまる、ひやつくわきくわえつらくにきようす、旁わが生命水清流、天路行人喜暫留、百菓奇花供悦樂、吾わが齊さい幸さい得はい此埔遊このほのいう」と云ふが如し。この種の興味を云々するは恐らく傍人の嗤笑を買ふ所にならん。然れども思へ、獄中のオスカア・ワイルドが行往坐臥に侶としたるも、こちたき希臘語ギリシヤ語の聖書なりしを。（一月二十一日）

## 三馬

二三子集り議して曰、今人の眼を以て古人の心を描く事、自然主義以後の文壇に最も目ざましき傾向なるべしと。一老人あり。傍より言を挟みて曰、式亭三馬が大千世界楽屋探しは如何と。二三子の言の出づる所を知らず、相顧みて哑然たるのみ。(一月二十七日)

## 尾崎紅葉

紅葉の歿後殆二十年。その「多情多恨」の如き、「伽羅枕」の如き、「二人女房」の如き、今日猶之を翻読するも宛然たる一朵の鼈甲牡丹、光彩更に磨滅すべからざるが如し。人亡んで業顕るとは誠にこの人の謂なるかな。思ふに前記の諸篇の如き、布局法あり、行筆本あり、変化至つて規矩を離れざる、能く久遠に垂るべき所以ならん。予常に思ふ、芸術の境に未成品ある莫しと。紅葉亦然らざらんや。(二月三日)

## 誨淫の書

金瓶梅、肉蒲団は問はず、予が知れる支那小説中、誨淫の譏あるものを列挙すれば、  
 杏花天、燈芯奇僧伝、痴婆子伝、牡丹奇縁、如意君伝、桃花庵、品花宝鑑、  
 意外縁、殺子報、花影奇情伝、醒世第一奇書、歡喜奇観、春風得意奇縁、鴛鴦夢、  
 野輿曝言、淪牌、黒幕等なるべし。聞く、夙に舶載せられしものは、既に日本語の翻案  
 ありと。又聞く、近年この種の翻案を密に削きけつに附せしものありと。若し這般しやはんの和訳艶  
 情小説を一読過せんと欲するものは、請ふ、当代の照魔鏡せうまきやうたる検閲官諸氏の門を叩いて  
 恭しくその蔵する所の発売禁止本を借用せよ。(二月十二日)

### 演劇史

西洋演劇研究の書今は多く出でたれど、その濫觴らんしやうをなせしものは永井徹が著したる  
 各国演劇史の一巻ならん。この書、太鼓喇叭たいこらつぱ、豎琴たてこなどを描きたる銅版画の表紙の上に、  
 Kakkoku Engekishi なる羅馬字ロオマジを題す。内容は劇場及機関道具等の変遷、男女俳優古今の  
 景状、各国戯曲の由来等なれど、英吉利イギリスの演劇を論ずること最も詳しきものの如し。その

一斑を紹介すれば、「然るに千五百七十六年女王エリサベスの時代に至り、始めて特別演劇興行の爲め、ブラツク・フラヤス寺院の不用なる領地に於て劇場を建立したり。之を英国正統なる劇場の始祖とす。（中略）俳優にはウイリヤム・セキスピヤと云へる人あり。当時は十二歳の児童なりしが、ストラタフォルドの学校にて、ラテン羅甸並にギリシヤ希臘の初学を卒業せしものなり。」の如き、破顔微笑せらるる記事少からず。明治十七年一月出版、著者永井徹の警視庁警視属なるも一興なり。（二月十四日）

寿陵余子

（大正九年）

# 青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第2刷発行

※「膏盲《かうまう》」に対し、底本は「「膏盲」が正しい。」と注記しています。

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年6月26日作成

2007年12月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 骨董羹

—寿陵余子の仮名のもとに筆を執れる戯文—

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 芥川龍之介

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>